

昔話の伝承と再生

— 語りの場の記憶から見えてくるもの —

矢部 敦子

私はこれまで昔話や口承文芸を学問として学んだことはなく、もちろん研究者でもありません。ですから、あくまでも一人の語り手として、いわば被験者の立場で昔話にまつわる自身の体験について紹介し、その中で「昔話の伝承と再生」について私なりに考えてみたいと思います。

生い立ちと家族環境

私は、昭和三十三年、和歌山県和歌山市で生まれました。ご存知の通り、和歌山市は紀州徳川家五十五万石の城下町です。私の生家があった辺りは戦前からの住宅街で、その当時、周りに農家は一軒もなく、小さい頃は田んぼや畑を見たことがありませんでした。

家族は、両親と父方の祖父母、叔母（父親の妹）、それから、一歳上に姉がいました。私が二才八か月のときに妹が生まれ、家族が八人になります。また、同じ地続きの敷地内に、祖父の

弟夫婦が三人の未婚の子ども（父の従姉弟）と一緒に住んでいました。今ですと大家族のように聞こえるかもしれませんが、その頃は珍しいことではなく、多分、どこの家でも似たような家族形態だったのではないかと思います。

昔話を一番よく聞かせてくれたのは、当時同居していた父方の祖母です。

祖母は、明治四十三年に和歌山市に生まれました。七人兄弟姉妹の四番目で、兄が二人と姉が一人、弟が二人、もう一人妹が生まれています。まだ幼い頃に亡くなったと聞いています。祖母の実家は、紙屋をしていました。父親の生家は元士族だったようですが、明治になって生活が苦しくなり、子どもの頃に商家に丁稚奉公に出されました。奉公先ではずいぶん苦勞をしたようですが、やがて主人から暖簾分けをしてもらい、自分で商売を始めました。祖母が生まれたときは既に店を構え、家の中には始終沢山の人が出入りしていました。母親は商家の女将として立ち働いていたので、子どもたちの身の回りの世話をするのは、主に子守り役として雇われた人たちだったようです。

祖母は、父親のことはよく話して聞かせてくれましたが、母親について語るのを聞いた記憶はあまりありません。祖母は針仕事が好きで、よくお稽古をサボって叱られたというような話ぐらいいです。祖母の母方のお祖母さんに当たる人は、気位が高く、自分の娘が商家に嫁いだことが気に入らなかつたようです。祖母が母親に連れられて実家を訪ねて行くと、髪をきちつと結

い上げてカネ（おはぐろ）をつけたお祖母さんが、いつも被布にお引きずりで侍女を従えていたと話していました。そんな話でしたから、父親にとつてはずいぶん煙たい存在だったようです。子どもの頃から父親に、「身分や出自で人を差別するものではない」と諭された、とよく話していました。

私は大変なおばあちゃん子で、一日の大半を祖母と過ごし、どこに行くときも一緒にくっついて行きました。ちよつとでも姿が見えないと不安になって、泣きながら祖母を探し回ったことを記憶しています。妹が生まれる頃までは、夜寝るときにも祖父と三人で川の字になって寝ていました。

ねごろ山の話

うちでは、「寝る」ことを「ねごろ山へ行く」と言い、「そろそろ寝ようか」というようなときには、「ぼちぼち、ねごろ山へ、行こか」と言いました。それで、夜、寢床の中で聞く話のことを、「ねごろ山の話」と呼んでいました。「ねごろ山」というのが我が家だけの呼び方なのか、他の家でも使われていた言葉なのかは定かではありませんが、寝間で祖母が語る「ねごろ山の話」は、『桃太郎』や『浦島太郎』や『一寸法師』といった「めでたし。めでたし」で終わる話が多く、こうした話を私はおとぎ話として認識していました。

「ねごろの山」の話の入口は、『長くて短い話』と決まってい

ました。

長い話、しちやろか。天から、ふんどし引張ったただそれだけの、短い話ですが、

もつと長い話して

天からな、なーがいふんどし、引つ張った

天から、なーがい、なーがい、ふんどし、引つ張った

と、「もつともつと、長い話して」とせがむ私が飽きるまで、長い長いふんどしの繰り返しでした。

それから、この『天からふんどし』に飽きると、『天から牛よだれ』が始まります。

「もつと、面白い話して」

と、言うのと、『面白い話』をしてくれました。これは

むかし昔。あるところに、白い犬あったんやして。そらあ美し、真白い犬でな。どこもかしこも白いで、顔が白けりや、面白い。

という話です。

それから、『鼻へ椎入って、ハナシ』という話。これは、父もよく話してくれました。

『ものすごい話』というのは、ものすごく年をとって、口の中には歯が一本もないお婆さんの話です。これは『ほんまの話』ともいいます。

こうした前置きのような形式譚は、毎晩、延々と同じ話が繰り返され、最後は『きりなし話』になりました。運が良ければ、

そのあとに『桃太郎』、『浦島太郎』、『花咲か爺』、などのおとぎ話、いわゆる本格昔話を聞くことができました。

ところが、子どものことですから、何とか起きていようと頑張るのですが、たいてい『きりなし話』になる頃には寝疲れてしまっています。たまにちゃんとした昔話を聞かせてもらっても、最後まで起きていることはまずありませんでした。

あくる日になって、祖母に「ねごろ山の話、続きして」と、せがむのですが、「もう、夕べ話した」と言って、なかなか語ってもらえません。「まだ、『めでたし。めでたし』聞いてへん」と言って、何度もしつこくせがんだものです。そうすると、祖母は歌で昔話を歌って聞かせてくれました。

『桃太郎』は、ご存知のとおり「桃太郎さん、桃太郎さん。お腰につけた、きびだんご…」の他に、「桃から生まれた桃太郎。気は優しく、力持ち」という歌もありました。

こうしたおとぎ話は、「むかしむかし、あるところに…」という冒頭部分は覚えていても、話の途中でどうしても歌が出てきてしまいます。それで、完成された物語として最初から最後まで語ることはとても難しいです。

「ねごろ山の話」には、日本の昔話だけではなく、『マッチ売りの少女』や『チルチル・ミチル（青い鳥）』といった外国のお話もありました。少し大きくなって絵本と出会ったとき、祖母が語る話とのイメージの違いに驚き、挿絵の美しさに魅入ってしまったのを覚えています。

やがて小学校に入学する頃には、祖母と寝床を分けられ、「ねごろ山の話」を聞くことができなくなってしまいました。

暮らしの中の昔話

祖母から聞いた話のほとんどは、こうした「ねごろ山の話」ではなく、普段の生活の中で折に触れて聞かされた教訓や自然にまつわる話です。それらの中には、祖母の語り口や自分が叱られたときのことなど、その場の状況をはっきり覚えている話が沢山あります。

例えば、『モズとホトトギス』、『ミミズの話』、『ミノムシの話』のような話は、たいてい庭先で実際に生き物を目にして聞いた話です。子どもの頃の私にとっては、お話の世界は自分のいる世界といつも繋がっていました。

夏、縁側でスイカを食べながら聞いた『アリとキリギリス』は、実際に自分の目の前で列をなしているアリと、虫かごに飼っているキリギリスの話でしたから、私は、かごの中のキリギリスに向かって、「大丈夫。冬になっても、ちゃんとエサ入れてあげる」と、こっそり話しかけていました。

『牛のまねをする蛙』の話は、「井の中の蛙、大海を知らず」という教訓と共に聞かされました。

『姥捨て山』は、お風呂の焚き口で、薪がパチパチ音を立てながら燃えている情景と一緒に、十能に乗った灰縄が思い出され

ます。祖母は、灰縄がどうやってできるか、というのを目の前でやって見せてくれました。

『鯖売り』は、当時鯖が嫌いだった私に、なんとか鯖を食べさせようとした話ではなかったかと思います。鯖を嫌がる私は、「こんな新しい鯖、昔は、京のお公家さんでも食べられんかったんやで。苦勞して運んだ鯖は、みな塩鯖やつたんや」と、言われしました。

『猿の生き胆』の話は、「口は災いの元、いらんことは言うな」という教訓譚です。「ナマコの口食うたら、要らんこと言いになる」と言われ、お喋りな私は、絶えず口を慎めと叱られていました。更には、当時は魚屋さんが魚を売りに来ていたので、ナマコの鮮度の見分け方や料理の仕方まで教わりました。

『いらん信心はするもんでない』という話は、金持ちの旦那さんが下男をお供にお伊勢参りに出かけ、山賊に襲われる話です。これを聞いたのは、小学校五年生の奈良遠足の前で、「奈良に行っても、神仏に余計な頼みごとをしてはいけない。ただ手を合わせて感謝するだけで良い」と教えられました。

『大岡裁判』の話や『毛利元就の三本の矢』の話は、ひとつ違いの姉と喧嘩をするたびによく聞かされた話です。

例を挙げるとキリがないのですが、こうした教訓譚は、わりあい大きくなってからもよく聞いていました。そのせいかどうか、語りの場と共にはつきり記憶している話が多いようです。

他にも中国の故事や伝説、それに歴史上の人物の話など、祖

母の語る話は非常に広範囲にわたりました。そういった話を祖母がどこから仕入れていたのか定かではありませんが、親の目を盗んで、お風呂を焚く火を灯りに隠れて本を読むのが楽しみだったそうです。「女賢しうて、牛売り損なう」「おなごに学問は無用」と言われ、本を読んでいるところを見つかっては、親にしよっちゅう叱られたと悔しそうに話していました。また、兄の自転車に乗ろうとしたのが見つかって叱られたなど、若い頃は相当お転婆だったようです。お芝居や映画を観るのも好きで、歌舞伎の名場面などは、まるで目の前で役者が演じているように真似をしながら語ってくれました。

「金剛石も磨かすば、珠の光もなざざらん。人も磨きてのちにこそ、真の徳は現るれ」というのは、『光明皇后』の話ですが、歌とお話がセットになっている話であるにもかかわらず、私の中では「ねごろ山の話」とは違うタイプの話として記憶されています。同じように歌と物語がセットになった『大楠公』や『廣瀬中佐』の話なども、子ども心にもはつきりと「ねごろ山の話」と別の種類の話だと認識していました。

これらは、聞かされた時期も実際に起こった時代もバラバラで、それぞれの話には何の繋がりもないのですが、思い出そうとすると芋づる式に次々に思い出されます。女学校時代の話や戦争の話など、祖母自身の思い出話と一緒に聞いた記憶があり、過去の出来事と切り離されずに、祖母の物語として繋がっているように思えるのです。

また、自分の子どもの頃の話や、親戚の人のことなどもよく話してくれました。

「人のふり見て、我がふり直せ」と言っつては、他人の失敗談を教訓のように聞かされましたが、幼いころの私にとつては、まるで笑話で、面白く聞いていたものです。

父親の晩酌で、コップにビールを注ぐときや、一升瓶からお醤油を醬油差しに小出しにするときなど、決まって「尻を上げろ」と言っつて、田舎から来た女中さんの失敗談を聞かされました。

この女中さんには他にも面白いエピソードが沢山あって、「お」を付けて丁寧に話すように教えられたところ、お客様の前でもんでもないことを言っつてしまったという話も聞いています。

他にも、田舎から来た近所のお嫁さんの話だと言っつて、

来客に「おははん、居てるか」と聞かれ、「おかはん、便所へ行た」と答えたのですが、それを、姑に咎められ、「そういうときは、『高野へお参りにいてます』と言うもんや」と教えられます。ところが、自分の里から来た使いの者に、「おかはん、今ちようど高野にお参りにいたとこや」と答えたため、使いの者が家の上がり込んで姑の悪口を言い始めたため、姑は便所から出るにあられなかつたというようないことがあつたそうです。

こうした笑い話は、民話の話題として全国にあるようですが、私は、大人になって民話の資料に触れるまで、ずっと実際にあつた出来事だと認識していました。

ですから、いわゆる昔話、本日のテーマである本格昔話と伝

説や世間話はきちんと分けて考えるべきなのでしょうが、聞き手である子どもの私にとつては、その分類は全く意識されていませんでした。

祖母以外の人に聞いた話

私が語る和歌山の昔話の大半は祖母から聞いたものですが、それ以外に、父親も少しは語りました。

父は、高度経済成長時代のサラリーマンの典型のような人で、普段は滅多に家にいませんでしたが、一九六〇年代の前半ごろまでは、まだ日曜大工で、庭にシーソーや滑り台を作つてくれたり、時々床屋に連れてくれたり、休日に家で家族と過ごす余裕がありました。床屋に行くとき、並んで道を歩いていると、よく『犬の足』の話聞かせてくれました。家では、お酒を飲んで機嫌が良くと、『畑に鋤を忘れてきたお百姓の話』や『鴨の捕り方』なども語りました。

『雀の捕り方』は、実際に、私が庭で遊んでいるとき、

「雀は、どうやつて捕るか、知つてるか？」

と言っつて、私に台所のパンくずを取つてこさせました。それから、そのパンくずを庭に撒いて、桶を斜めにかぶせるように置き、棒切れにテグスをしぼりつけて、桶の端を乗せて罌をこしらえました。父は、テグスを長く伸ばして、その端を私の手に持たせ、

「ええか、もうじき、雀、飛んでくるさかい。雀が来たら、これを思い切り引つ張れ」

そう言つて、庭石の陰に隠れて雀を待つように言いました。

私は、いくら待つても雀が飛んでこないのです、とうとう飽きてしまい、家の中にいる父親のところに行きました。父親が

「どうや、雀、捕れたか？」

と、聞くので、

「あかん。雀、来えへん」

と、答えると、

「そうか。ほや、もつとええ方法、教せちやるか」

と言つて、

「米を焼酎に漬けて置いとけ。ほいたら、雀、来て、勝手に米食うて、酔っぱらうて寝るさかい。それ捕まえたらええ」

と、教えてくれました。

それから、私は、祖母に頼んで、お米を焼酎に漬けてもらい、教わつたとおりにやつてみましたが、やつぱり雀は捕まえられません。

「やつぱり、あかんかった」

と、父親に言つと、

「お前、枕、置いといたか」

と、言つのです。

父によると、さや付の南京豆を一緒に撒いておくと、雀はそれを枕だと思つて安心して寝るのだそうです。私は、またもや

祖母に南京豆を欲しいとせがみましたが、祖母は笑つて、

「お前も、もうたいがいにせえ」

と、父親に言うだけで、南京豆は分けてもらえませんでした。

そんなふうでしたから、この『雀の捕り方』は、私にとつては昔話でも何でもなく、自然の実験みたいなものでした。

母は昭和十年生まれで、子どもの頃は戦時色一色だったせいも、いわゆる昔話というようなものはほとんど聞いたことはありません。母の語る話は、「キグチコヘイハシンデモクチカララツパヤハナシマセンデシタ」とか、「肉弾三勇士」とか、「一の谷の合戦」などで、多分国民学校の教科書の影響だろうと思えます。それから「兵隊さんありがとう」「紀元は二千六百年」「国民学校一年生」などの歌も歌つて聞かせてくれました。母親が語る戦争の話は、縁故疎開で従兄弟姉妹たちと過ごした思い出話が中心でした。

私はとても泣き虫で、泣くと母に、「泣いたら、兵隊さんに、銃剣で刺殺される」と脅されました。それは本当に恐ろしくて、今も忘れられません。

その他、宴席で誰が語るともなく語られた艶話、近所のうわさ話など、家族以外の人からもいろいろ話を聞きました。保育園の先生のお話やお寺で聞くお説教がとても楽しみで、その中には今でもはつきりと覚えていいるものがあります。

ただ、それらをすつと忘れずに覚えていたわけではありません。昔話を熱心に聞いていたのは、だいたい小学校に上がる前

のことで、文字を覚えて自分で本を読むようになる、祖母の語る昔話にはだんだんと関心を寄せなくなっていました。

記憶の上書き―音から文字へ

ちようど姉が小学校の一年生のときです。私は、学校から帰ってきた姉と二人で、祖母の語る『牡丹餅を食べた仏様』の話を聞いていました。祖母の話では、和尚さんが仏様を叩くと、仏様は「食わん」と言って、小僧さんの仕業だとばれてしまうというのが落ちになっています。ところが、祖母が語り終わると、一緒に聞いていた姉が、

「お祖母ちゃん、それ続きがあるんやで、ホンマはね…」

と、続きを語り始めたのです。学校にある本で読んだと言っていると、仏様を庭の池に浸けて「食った、食った」と言わせて小僧さんが言い逃れる、という部分を教えてくださいました。

そのとき、私は、学校に行っている姉がとても誇らしくて、本はなんて凄いだらうと思いました。そして、家の本棚に並んだ岩波の子どもの本を、片っ端から自分で読むようになりました。

一九六〇年代、瀬田貞二さんや石井桃子さんが訳した本が次々に出版されていた時代で、三、四年生の頃には、学校の図書室にある本に飽き足らなくなり、県立図書館に通って、新刊本を一番に手にするのが何よりの楽しみでした。その頃、ナルニア国

に行きたくて、綿入れと懐中電灯を持って長持に何時間も隠れていた、風が吹くと屋根に上ってメアリ・ポピンスが降りて来るのを待っていたり、今思うと、かなり変な子どもだったと思います。

フアージョンの『ガラスのくつ』を初めて読んだときの衝撃は、今も忘れられません。本物のお話に出会ったと強く感じたのです。そして、どういうわけか、祖母の話は偽物でつまらないと勝手に思い込んでしまいました。それ以来、自分から祖母に昔話をせがむことを全くしなくなり、文字で書かれたものが本当の物語だと思えるようになりました。そうして、本で読んだ物語に上書きされ、耳で聞いた元の話は次第に忘れてしまいました。

子育てと昔話

そんな私が、どうして昔話を語るようになったかというところでは自分の子育てがきっかけです。

最初は絵本を読んでやっていたのですが、長女が三歳、長男が二歳のとき、三人目が出来て、子ども二人を膝に乗せるのは辛いし、自分は眠くて横になりたいし、というので、だんだんとお話を中心になっていきました。ごろごろと横になりながら、お腹の赤ちゃんのことや上の二人が生まれたときの話、それから、二人の子どもを主人公にした話など、思いつくまま適当な

作り話を始めたのです。

ところが、そうやって子どもにお話を語っていると、自分自身が祖母からお話を聞いたときのことが頭に浮かんできました。子どもの名前の由来を話していると、自分が「敦子」と名付けられたわけや、その名前が嫌で仕方がなかったこと。それで『敦盛の最後』を聞かされたこと。子どもに良すぎる名前を付けてはいけないといって『寿限無』を聞いたこと。などなど：いろいろなことを次々に思い出しました。

それは、まるで過去と現在が二重写しになっているような不思議な感覚でした。自分は、今確かにここにいながら、何十年もさかのぼって、子どもとして同時に目の前にいるのです。

それから、毎晩一時間から二時間ぐらい、昔話だけでなく、その日の出来事や身の回りのことなど、子どもと一緒に喋りをするのが日課になりました。自分が好きだった話を、自分の子どもと一緒に楽しめるようになると、これまですっかり忘れていた話を次々に思い出しました。

お話を語り始めたばかりの頃は、和歌山の昔話を意識することとは全くありませんでした。『赤ずきん』や『大きなかぶ』、それにインソップの話など、繰り返し返しのある分かりやすい話や、昔話の童謡を歌って聞かせていたように思います。

例えば、子どもに留守番を頼んで、近所にちよつと買い物に出るときは、『おおかみと七匹の子やぎ』の話をして、「インタ

ホンが鳴っても、すぐにドアを開けるんじゃないよ」と言い聞かせてから出かけました。家に帰って、インタホン越しに「帰ってきたよ。開けて」と言うと、子どもは、「お母さんの声は、もっときれいだよ」とすまして言います。それから、ドアの間から、「手を出して」、「足を出して」、と言って、さんざん子ヤギごっこを楽しみました。

また、上着を着たり靴下を履いたりするのを嫌がって、なかなか言うことを聞かない子どもを叱りつけると、「お母さんには、この靴下が見えないの？この靴下はね、きれいで優しいお母さんにしか見えないんだよ」と、『裸の王様』のセリフでやり返されたこともありました。

祖母から聞いた昔話を特に意識するようになったのは、子どもが少し大きくなった頃です。我が子が、かつて自分がしてかした失敗と同じ失敗をしたとき、目の前で泣いている子どもに何十年も昔の自分自身の姿を重ね合わせて思い出すことがよくありました。そんなときには、祖母に聞かされた昔話や自分自身の失敗談を語って、諭したり慰めたりしました。祖母も、そうやって自分の失敗談を聞かせてくれたのです。

「語り」との出会いー聞き手による語りの違い

夫の転勤に伴い、東京の小平で暮らし始めてしばらくした頃、

うちに遊びに来た近所の子どもたちがお話を聞いてくれるようになり、そのうち、子ども文庫や小学校でも昔話を語る機会ができました。そこで私は、外では他の子どもたちにも分かるように方言を控え、家族だけにしか分からないエピソードや教訓を除いたお話を語るようになりました。反対に、我が子に対しては先祖に繋がる根っこのようなものを遺しておきたくて、家の中ではわざと方言を使って話すようになりました。

同じ頃、文庫の方に図書館のおはなし会に誘われ、語りの学習会に参加しました。そこでは、たくさんの語り手たちが一生懸命にテキストを覚え、おはなしの練習をしていました。ところが、私には語るためにお話を覚えるということの意味が理解できず、どうしても文字を読んでお話を覚えることができませんでした。

そんなとき、偶然に家の近くで活動している小平民話の会のことを知り、会員の方に電話をしました。この小平民話の会の出合いが、私が故郷の昔話を思い出す大きなきっかけになったのです。小平民話の会で昔話を聞いてもらうようになって、それまで忘れていた話を更に次々と思い出しました。日常生活のさまざまな場面で聞いた生き物の話や教訓譚は、それを思い出そうとすると、何十年かの歳月を一瞬で遡って子ども時代の思い出がよみがえります。そして、祖母の語り口を思い出しながら語ることで、今ではほとんど使われなくなった古い和歌山の言葉がよみがえってきたのです。

当時私は、家では自分の子どもに、方言で昔話や祖母の思い出話、家族のエピソードなどを自由に語り、学校や地域の文庫では方言を控えめにした分かりやすい話を語り、小平民話の会では和歌山の昔話を選んで語っていました。

自分では特に意識していたつもりはありませんでしたが、今思い返すと、地域の子どもたちにはイソップやグリムの話を自然に語っていたのに、小平民話の会の会員の前では、そういった話はほとんど語っていません。『桃太郎』や『浦島太郎』は、私が「語れない」と言っても、「いいから、語って」と言われるのですが、あきらかに外国の話だと分かっているものについては全く聞かれることがなかったのです。それで、確かに祖母から聞いた記憶があるにもかかわらず、『ヘンゼルとグレーテル』や『赤ずきん』の話を語ることはなく、あきらかに和歌山の昔話だと思っているものを選んで語ってきました。

わが子には方言で話せても、地域の子どもたちと話すときには自然に方言が控えめになります。民話の会で語るとき、昔話にはあえて古い紀州弁を残して語りますが、説明や思い出話をするときには、なかなか方言が出てきません。それは、たとえ「方言で好きなものを語ってください」と言われても、語り手には、自然に聞き手の要望に応えようとする意識が働いてしまうからではないかと思います。ですから、いくら方言で話そうと思っても、相手が理解できないことが分かっていると共通語に近くなってしまい、反対に家族や同郷の知人に対しては、

自然に方言が出てしまうのです。

語りは、聞き手がいなければ成り立ちません。むしろ私は、聞き手の存在こそが語りを紡ぎ出すのではないかと考えています。

記憶の再生

ところで、私は子どもの頃に沢山の話を聞いて育ちましたが、覚えている話全てを語れるというわけではありません。自分の言葉にして語れる話と、頭の中でストーリーをなぞることができただけの話があります。では、語れる話と語れない話の違いはどこにあるのか、ということを少し考えてみたいと思います。

話の筋が分かっているのに語りにならない話には、いくつか特徴があります。そのうちの一つは、『桃太郎』、『花咲か爺さん』、『一寸法師』など、歌で聞いた昔話です。ねごろ山の話の多くがこれに当たります。先ほどお話ししたように、話の冒頭部分は、「むかし昔、あるところに……」で始まるのですが、途中で必ず歌が出て来て、話のリズムが変わってしまうと語ることができなくなってしまうのです。

次に、祖母が歌舞伎やお芝居で観たという話も語ることができません。『葛の葉』、『弁慶と牛若丸』、『先代萩』など、歌舞伎の名場面のセリフは思い出せても、物語は断片的で、しかも作者の表情がどうだったとか、先代の芝居の方が良かったとか、

聞いたときの祖母の感想が混じってしまい、全体を通して語ることはできません。

また、本を読んで上書きしてしまった話も、耳で聞いた元の話の思い出すことは難しいです。先ほどの『シンデレラ』がそうですし、『安寿と厨子王』も、『山椒大夫』を読んでは、祖母から聞いた話をすっかり忘れてしまい、「安寿 恋しや、ほうやれほ。厨子王 恋しや、ほうやれほ。鳥も生あるものなれば、とつとと逃げやれ、追わずとも」という、母親のセリフが耳に残っているだけです。

自分が子どもの頃に聞いた記憶がはっきりしていて、祖母の語りを鮮明に思い出すことができる話は、比較的語りやすく、いろんな場所で語っても内容や言い回しが大きく変化することはありません。けれども、たとえ短い話でも、記憶が断片的であったり、途中で余計な要素が混じっていたりすると、物語としてきちんと完成されていないため、頭の中でつなぎ合わせるのに苦労することがよくあります。それでも、聞き手が自分の子どもの場合は、「それからどうなったの?」、「この前は、こうだったよ」と合意の手が入り、繰り返し語ることで徐々に整理されていく場合もありました。

今では、我が家の三人の子どもは既にみな成人し、昔話を語って聞かせる機会ほとんどなくなっています。かつての自分がそうであったように、子どもは、昔話を聞いたことなどすっかり忘れていくかもしれません。けれども私にとっては、

子どもと枕を並べ、夜ごと取り留めもないお喋りをしながら昔話を語り続けた数年間は、子育ての黄金期ともいえる宝物のよ
うな時間でした。

伝承の昔話の可能性

— コミュニケーションツールとしての「語り」 —

最後に、現在、私がどうやって語りを次の世代に手渡そうと
考えているか、ということをお話します。

今、学校や図書館では「読み聞かせ」や「おはなし会」が頻
繁に行われ、私の住む小平市でも、図書館や学校で地域のボラ
ンティアの方が熱心に活動されています。語り手を養成する講
座もあちこちで開催され、語りに興味を持つている方や語りた
いという方で賑わっているように伺っています。

ただ、昔話の研究者の多くは、「昔話の伝承は途絶えた」或
いは、「途絶えつつある」と思っておられるのではないかと思
います。けれども、本当に伝承は途絶えてしまったのでしょうか。
実は、私はそうは思っていません。

現在、私は、月に一回、親子連れ、特に小さい子どもを持つ
方に、お話を楽しんでもらう機会を持っています。聞き手のほ
とんどが赤ちゃんとお母さんですから、昔話といっても、方言
で語る日本の昔話には馴染みがありませんので、分かりやすく
てリズムのある話が中心です。わらべうたや手遊びを交えなが

ら、親子のコミュニケーションツールの一つとして昔話を紹介
しています。

そこで、実際に子育て中のお母さん方のお話を伺うと、ほと
んどのご家庭で、ほぼ日常的に「語り」が自然に行われている
ことに気付きました。もちろん、おはなしの会にいらっしゃる
方たちですから、多少なりとも興味関心のある方々が集まって
いることは事実ですが…。

あるお母さんは、子どものお気に入りのぬいぐるみやお人形
を使って、「○○ちゃん、一緒に遊ぼう」と話しかけたり、簡単
なストーリーを作って、一緒に遊んでいるそうです。また、あ
るお母さんは、子どもの好きな絵本に登場するキャラクターを
自由に動かして、勝手に物語を想像して語り聞かせているそう
です。そして、その中に「好き嫌いしないで、何でも食べて、
早く大きくなってね」とか「みんなで仲良く遊ぼうね」とか、
さまざまなメッセージを自然に入れて語っています。

「それが、語りなんですよ」と、私が言うと、「それって、口
から出まかせの、ただの嘘話じゃないんですか」と、みなさん
驚いたように仰います。だれもそれを「語り」だと意識してお
られないのです。でも、語りの始まりというのは、聞き手と語
り手が一緒に紡ぐ物語のことだと考えれば、お母さんが子ども
のために語る作り話は、れっきとした語りの芽ではないかと私
は考えています。

もちろん、伝統的な日本の昔話の継承にはつながらない、と

いご指摘があるかもしれません。しかし、私自身が祖母から聞いた話も、決して日本の昔話ばかりではありませんでした。グリム童話が日本に紹介されたのは百年以上も昔です。イソップ物語は、すでに江戸時代には日本に入ってきていました。人が自由に行き来するようになって、私自身、自分の語る昔話が、もはや和歌山の昔話なのかどうかも怪しくなっています。人が直接言葉で伝えあうことを大切にし、あくまでも口承にこだわろうとするなら、その中身が実生活に適応して変化するのは当然ではないでしょうか。

一見すると出鱈目の嘘話のようですが、子どもたちは、いくら聞いても聞き飽きることがなく、同じ話を繰り返しせがみまです。そうして、やがてお母さんの話として記憶されていくのかもしれない。

まだ伝承の土壌を耕し始めたばかりで、どんな芽が出るのか、本当に昔話が根付くのか、まだまだこれからです。でも、お母さんが子どもの話に耳を傾け、親子で一緒にお話を楽しむことができるようになれば、きっと、子育てがもっと楽になると思います。昔話を通して、子育ての楽しさを伝えることができれば、いつか聞き手が語り手を育てる「伝承の語り」が生まれるのではないかと期待しています。

(やべ・あつこ)／小平民話の会

シンポジウム／第三九回大会「口承の記憶と継承」

昔話の心理機能と意味世界

— 個から場へ —

廣瀬 清人

1、はじめに

本稿は第三九回大会のシンポジウムで発表した内容をもとにして、その内容を大幅に加筆したものである。筆者は非会員のためにシンポジウム開催前に本学会の趣旨がよく分かっていた。名称が日本口承文芸学会で、またシンポジウムのテーマが「口承の記憶と継承」であったので、三弥井書店から出版した『集団パラダイムにおける昔話の心理機能と意味世界』（以下、「拙著」と表記する）で検討したバートレットの記憶理論を昔話の語りに位置づける試みと昔話の意味世界を伝えればよいと考えていた。パネリストの役割を終えて初めて、本学会が口頭伝承と書承文芸の両方を視座に入れた学会であると知ったのである。このため、シンポジウムにおいて寄せられた貴重な質疑に対して当日の回答は不満足な内容に終わってしまった。そこで、本稿では拙著の内容の紹介よりも質疑応答の議論を深